

## 第7節 キャリア教育の評価

### 1 評価の基本的な考え方

各学校におけるキャリア教育の実践が、その教育目標を達成し、更により効果的なものとなるように発展させていくためには、キャリア教育の目標を明確に設定した上で、適切な評価を行うことが大切である。

評価の目的は、生徒の成長や変容を把握することであり、その評価に基づいて取組の改善につなげることである。したがって、キャリア教育の評価には、生徒の成長や変容に関する評価と教育活動としてのキャリア教育全体の評価の視点が必要となる。各学校には、自校の目標及び育成する能力や態度、教育内容・方法等との関係から、生徒にどのような力が身に付いたのか、その育成のための教育活動は効果的であったか、指導計画は適切であったかなど、多面的に評価することが求められる。

評価に当たっては、「終了時の評価」として行う目標の達成状況の評価だけでなく、「実践過程での評価」も重要である。前もって計画した活動が、効果を上げつつあるかどうか、予想しなかった問題や課題が起きていないかなどを確認し、必要な場合には計画の修正を考慮することなども大切である。

現在、マネジメント・サイクルとして、計画（Plan）を実行（Do）し、評価（Check）して改善（Action）に結びつけるP D C Aサイクルの重要性が指摘されている。下図は、評価を実施するプロセスを示したものである。キャリア教育の全体計画等においても、その妥当性や有効性等を適切に評価するとともに、その評価を改善に結び付け、次期の計画等へ反映させることが重要である。

#### 評価からみたP D C Aサイクル（評価実施のプロセス）



#### 《アウトプット評価とアウトカム評価》

キャリア教育の評価については、アウトプット評価に加えてアウトカム評価を実施することが大切である。アウトプット(output)とは、産出物や作品(数)、出力という意味であり、アウトカム(outcome)とは、成果という意味である。

高等学校におけるキャリア教育の実践においては、「職業人による講演会を実施したか」「就業体験を何日実施したか」といった「ものさし」を用いた評価がアウトプット評価である。これに対して、職業人による講演会や就業体験によって、「生徒の意欲・態度や能力が変容したか、学習意欲の向上や具体的な進路目標の決定に結び付いたか、キャリア発達がどの程度促進されたか」などを評価するのがアウトカム評価である。

このアウトカム評価を行う際にも、取組の目的・目標に即した「ものさし」となる評価指標をあらかじめ設定しなければならない。そのためには、「基礎的・汎用的能力」のように、生徒が身に付けるべき力を評価可能な形で明示し、取組の目的・目標を定める必要がある。このように、一連のP D C Aサイクルの中で、生徒の達成度を通して、キャリア教育の成果を検証するのがアウトカム評価である。

〔出典：「キャリア発達にかかわる諸能力の育成に関する調査研究報告書」平成23年3月 国立教育政策研究所〕

## 2 生徒の成長や変容に関する評価

### (1) 評価の視点と方法

生徒は日々の学校生活を通して成長し変容していく。学年進行や時間の経過、啓発的な体験などによってもたらされる変容は、生徒自身も感じているはずである。このことから、キャリア教育において、生徒が自らの学習活動の過程や成果を振り返ることは重要である。また、キャリア教育を進める過程において、教師は、指導計画に定めた目標や学習のねらいに沿って、生徒一人一人の到達度を評価し、キャリア発達の程度を把握しておくことが求められる。その際、生徒のキャリア発達の速度や様相には個人差があり、環境による影響も考えられること、個々の生徒の状況や学校・地域によって設定する目標も多様であることに留意する必要がある。さらに、指導と評価の一体化を進めるためには、キャリア教育の視点を踏まえた授業、活動の一層の充実を図ることが望まれる。

これらのことから、現状においては、個々の生徒に対するキャリア教育の評価は次の点に留意する必要がある。

- 各教科、総合的な学習の時間、特別活動の目標やねらい、また、各教科等の評価規準にキャリア教育の視点を盛り込むこと
- 人間としての在り方生き方の探求や、豊かな自己形成に関する視点を盛り込むこと
- 進路指導の評価にキャリア教育の視点や内容を取り入れること

また、キャリア教育に関する学習活動の過程や成果に関する情報を集積した学習ポートフォリオを作成し、積極的に活用していくことなどにより、生徒が自らの将来の仕事や生活について考える機会を作ることも必要である。

#### 集積させたい学習成果物の例

- 生徒が作成したレポート、ワークシート、ノート、作文、絵など
- 学習活動の過程や成果の記録
- 自己の将来や生き方に関する考え方の記述（進路相談シートなど）
- 生徒の自己評価や相互評価の記録（評価カードなど）
- 保護者や地域、職場の人々による他者評価の記録（体験記録カードなど）
- 教師による行動観察記録、進路学習などで行った検査や調査の結果、学業成績など
- ※ これらの学習成果物の効果的なファイリングについては、共通教科情報との連携が考えられる。

これらの学習成果物はできるだけ生徒に返却し、さらに自己評価によって生徒自身が自らの成長や変容を実感できるようにすることも大切である。その際の評価項目は、生徒個人に育まっている内面の良さや能力を積極的に評価できるように設定することが望まれる。キャリア教育における生徒の学習状況の評価は、生徒の資質・能力・態度を的確に捉え、それを発展的に育む教職員の学習指導に還元されるよう吟味しておくことが求められる。

## (2) 定性的な評価と定量的な評価

キャリア教育を通じた生徒の成長や変容については、多様な評価の方法が考えられる。二者・三者面談などの面接の機会を活用した面接法、生徒の日常的な学校生活の様子を看取する方法などの定性的な方策は、これまでも多くの学校において実践されてきた。今後は、定量的な方策も積極的に取り入れ、より多様な視点から生徒の成長・変容を捉え、指導の改善に生かす必要がある。

定量的な評価の方策としては、下表のように既存の職業興味検査や適性検査などを活用する検査方法や、アンケートなどによる調査法があるが、キャリア教育の目標はそれぞれの学校が地域や学校の実態等を踏まえつつ、生徒の発達の段階に即して定めるものであることから、学校ごとに作成し実施するアンケートなどを通して生徒の成長や変容を捉えることが不可欠であると言える。

### 評価の方法（生徒理解の方法）

評価の方法	具体例	主な把握の方法
検査法	職業興味検査、職業適性検査など心理検査の活用など	定量的
調査法	チェックリストやアンケートの活用など	定量的
面接法	二者・三者面談などの面接や日常的な話し合いなど	定性的
観察法	学校生活場面における観察を通じた印象など	定性的

※上記の4つの方法には、それぞれが定性的な把握と定量的な把握の両方を含む場合がある。例えば、定量的な調査でも自由記述を用いれば定性的な把握が可能であり、定性的な観察でもチェックリストを用いた組織的な観察によって定量的な把握をすることも可能である。しかし、一般的に定性的な把握には面接法・観察法が適しており、定量的な把握には検査法・調査法が適している。ここでも、重要なポイントは、目的・目標に合わせた評価方法を用いることである。

### 《定量的な評価を行う際の留意点》

- ・ 学習活動ごとの事前・事後のアンケートの実施などは、高頻度になると慣れや辟易した感覚が結果に影響を及ぼす可能性があるため、間隔を空けて実施する方が望ましい。
- ・ 心理検査の結果は実施時点での状況を示しているため、結果に一喜一憂するのではなく経過を示す資料として活用するよう心掛ける。

### 《定性的な評価を行う際の留意点》

- ・ 評価には面談や観察をした教師の主観が含まれるため、必ずしも生徒の実態に即したものにならない場合がある。一つの評価指標で判断するのではなく、複数の指標を用いて多面的・多角的な評価を行うことが望ましい。

## 3 教育活動の評価と改善

### (1) 評価の視点と方法

キャリア教育の実践がより効果的な活動となるためには、各学校における到達目標とそれを具体化した教育プログラムの評価項目を定め、その項目に基づいた評価を適切に行い、実際の教育活動の改善につなげていくことが重要である。

その際、到達目標を一律に示すのではなく、生徒の発達の段階やそれぞれの学校が育成しようとする能力や態度との関係を踏まえて設定することが必要である。また、評価の実施に当たっては、学校評価等を生かし、その評価の結果を公表していくことが重要である。

また、評価の実施に当たっては、「誰が評価するのか」(評価の主体と対象)、「いつ評価するのか」(評価実施の時期)を明確にし、特定の評価指標に依存することなく、教育活動を多面的・多角的に捉えるとともに、中長期的な効果の検討をすることも考えに入れて無理のない評価を行うようにすることも重要である。

### 基本的な評価の視点の一例

#### ①目標の設定について

- 目標の設定は具体的で妥当であったか
- 目標設定過程への各教員の参加度、理解度はどうであったか
- 保護者などへの説明は適切であったか など

#### ②実践中の評価について

- 生徒は積極的に取り組んでいるか、理解はどうか、予測した取組をしているか
- 生徒はプログラムの内容を理解しているか
- 生徒に期待した変化や効果の兆しはあるか
- 生徒の感想はどうか、教職員は適切な指導を行っているか
- 保護者や地域などへの説明は適切か など

#### ③評価の方法について

- 評価のための計画は適切に立てられていたか
- 評価方法やそのための資料は事前に検討され、用意されていたか
- 評価方法は具体的かつ適切であったか
- 教職員、生徒の評価への理解は十分であったか など

#### ④「生徒の変化」の評価

- プログラム実施中の生徒の態度の変化はどうか
- プログラムの目標の達成状況（実施過程中及び終了時）はどうか
- 特に顕著な生徒の行動・態度、課題は何か など

#### ⑤評価を受けての改善について

- 今までの評価を教職員、保護者、地域等で客観的に見直し、共通理解がされているか
- 評価を適切に次の改善策として生かしているか
- 改善策を受けて実行プログラム（アクションプラン等）が立てられているか など

## (2) 改善の視点と方法

教育活動の改善に当たっては、評価の結果に基づき、教師一人一人が日常の授業や学習活動を見直し、その問題点や課題解決に取り組む姿勢が基本となる。その際の視点としては次のようなものが考えられる。

### ① 指導計画の改訂に生かす

評価の結果から目標に対して不足している能力や資質が明らかになったら、どのような方法でその能力を向上させるのか、そのためにどの活動を強化する必要があるのかを検討する。

### ② 校内研修に生かす

教職員は、一人一人のキャリアが多様な側面を持ちながら段階を追って発達していくことから、明確な方針を持って、教職員それぞれの発達課題を達成できるようにする必要がある。そのために評価の結果を基にした校内研修を行い、具体的な経験（年間を通じた実践）の後に振り返りを行い、そこから得た気づきや経験を共有して新しい状況に応用することが大切である。

### ③ 運営組織の改善に生かす

キャリア教育には全ての教職員が関与することが不可欠であり、キャリア教育のプログラムを通して、「基礎的・汎用的能力」を身に付けさせるという視点は全ての教職員が共通して持たなければならない。そのために、評価の結果を校長のリーダーシップや連携の仕組み、資源の確保、組織文化の醸成に生かす必要がある。

### ④ 生徒の個別的な支援・指導に生かす

ホームルーム単位や学年単位で見て、平均的にどのような変化が見られたかという全体的な傾向を検討して取組の改善に結び付けるだけでなく、生徒一人一人の状態を把握し、それを個別の働き掛けにつなげることが有効である。

**⑤ 学校間連携に生かす**

キャリア教育のプログラムとして学校間連携に取り組んだ場合には、評価によって双方の学校や生徒にどのような変化が見られたかを把握し、改善につなげることが重要である。また、キャリア教育の展開を通して教職員の交流が促進されることも多く、教職員や学校組織全体の活性化につなげることもできる。

**⑥ 地域・社会連携に生かす**

評価の結果を外部に公表し、生徒の現状と課題や体験学習などの結果としてどのような効果が見られたのかを伝えることにより、企業や団体などの協力を得て、地域・社会連携を促進することができる。

**4 各学校の指導計画の評価と改善****(1) 評価の視点と方法**

各学校においては、キャリア教育の目標の達成を目指した指導計画が、学級、学年、学校全体それぞれで効果的に機能しているかを適切に評価していくことが求められる。

指導計画の評価については、次のような視点が考えられる。

**指導計画に対する評価の視点の一例**

- キャリア教育が目指す目標の具体性と妥当性
- 育てたい資質・能力・態度の具体性と明瞭性
- 各学年の発達の段階を考慮した学習内容の系統性
- 教育課程編成における各教科等との関連を意図した工夫の有無
- 計画されている教育活動の目標や実施時期、時間配分などへの配慮の有無
- 計画における問題解決型の学習内容や啓発的体験活動等の設置の有無
- 計画されている教育活動により期待される、生徒の変化や効果の具体的明示の有無
- 評価方法の適切な提示の有無
- キャリア教育の意義と実践への計画、方法などに対する教職員相互の共通理解度
- 教職員の評価の目的、方法などについての理解度と適切に評価できる能力の有無
- キャリア教育の確立された推進体制の有無

**(2) 改善の視点と方法**

指導計画の改善に当たっては、評価結果を踏まえ、できるだけ客観的かつ多面的・多角的な視点で検討を行い、改善策を準備することが重要である。特に、次年度への改善に向けては、その時期を考慮した上で、教職員の情報交換の機会を設定したり、キャリア教育推進委員会を開催したりするなどして、改善策を十分に検討することが必要である。

なお、キャリア教育を進めていくためには、各学校がそれぞれ創意工夫した計画を着実に実践していくことが必要である。その際、自校の取組や校内研修の在り方、成果等について「チェックシート」などの活用により客観的な点検を実施することが重要である。